

模倣・鏡・〈ふり〉

藤田，雄飛
九州大学大学院人間環境学研究院（教育哲学）

<https://doi.org/10.15017/1906395>

出版情報：教育基礎学研究. 13, pp.73-90, 2016-03-28. Faculty of Human-Environment Studies,
Kyushu University

バージョン：

権利関係：

模倣・鏡・〈ふり〉

藤 田 雄 飛

1. 問題設定

本稿は、模倣と〈ふり〉を巡る発達の哲学のための試論である。そのために以下では、私たちが他者の行動を模倣することや演技的に振る舞うことを語る際に想定する概念的な範疇を拡張するとともに、それらが立ち現れてくるための領野が生成してくるプロセスを鏡との出会いのなかに見出すことを目指していく。一見たわいもないことのように思われる鏡との出会いはしかし、その後の生を空間とともに組み替える劇的な出来事であることが明らかになるだろう。その文脈設定のためにも、まずは振る舞いというものが持つ概念的な位置づけについて検討する作業から始めていくこととする。

土戸はゴッフマンのパフォーマンス論を経由しながら、私たちが相互行為の中でとる振る舞いを〈ふり〉という概念を用いて描き出している¹。

（〈ふり〉において問題とすべきは、）オリジナルの一次的な状態があって、それを秘匿しつつ二次的に偽装・模倣して提示するという、オモテとウラをなした構造ではない。むしろ、一つの行為が、一方で一定の目的を求めて遂行されるという面をもちながら、同時に他方でそれ自体が演技として表出されるという面をもつという両義的な意味を有している点に注目すべきなのである²。

土戸はこうした図式のもとで、「演技なき全き遂行としての行為、あるいは遂行なき全き演技としての行為など、実は存在しない³と語り、私たちの日常的な振る舞いを遂行と演技のスペクトラムにおいて捉えようと試みている。すなわち、「〈ふりをする〉とは、一方の「生真面目」すなわち行為そのものになりきったあり方と、他方の「醒めたあり方」すなわち自身の行為から距離を取ったあり方の、双方を含んだ行為」であり、前者は遂行的な側面を、そして後者は演技的な側面を示しているのである⁴。このように土戸は〈ふり〉という言葉によって、従来、意識的な演技という意味を担わされてきた「ふりをする」の範疇を拡張し、私たちの対人関係（そして時にそれは具体的な状況としては他者が存在しない可能性も含んでいる）上に生起する諸行動を語る分析概念として提示していった。

ところで、このように対人的な振る舞いを遂行と演技の両義性のもとで捉える時、ある問いが沸き上がってくる。果たして私たちは、何を対象として〈ふり〉をするのだから

うか？そして、その対象とはどのように捉えられていくのか？と。

こうした問いを抱きつつ、本稿ではメルロ＝ポンティのソルボンヌ講義へと歩を進めていくこととする。なぜなら、彼がそこにおいて取り組んだ「鏡像」と「模倣」に関する分析は、〈ふり〉が対象とするものの原初的な生起について何らかの示唆を与えてくれると考えられるからである。そのためにも、まずはふりと模倣の一般的な理解から始めていくことにしよう⁵。

そもそも、模倣とは具体的な他者（あるいは端的に「ある対象」）をモデルとした振る舞いであり、対してふりは特定の他者を含みつつもそれに限定されない一般性⁶をモデルとするような振る舞いとして位置づけうる限りにおいて、模倣とふりは同一の種類のうちにある。ここでのふりの「一般性」とは、例えば「泣くふり」であったり、「父親ぶる」であったりというように、人称を必要としないような一般的な存在をイメージすることによって生じる振る舞いであるということによる。対して、模倣は具体的な他者の行動を対象としてそれを再現するということである。ただし、こうした対象の差異にも関わらず、ふりと模倣は素朴な理解においては強い共通項を持つと言える。すなわち、ある他者の行動についての表象・イメージがまず主体にあって、それに身体各部を合わせていくこととして捉えられるような行動原理の認識である。この意味では、両者ともに、他者の視覚像を契機としていると言える。

しかし、本稿が焦点を合わせていくのは、両者の差異ではなく、むしろ両者を可能にしている地平の生起の問題である。まさにこの「像」そのものがいかに生じてくるのかという「像」の発達論・「像」の発生論こそが問われなければならない。この作業は同時に、存在と現れの分離という哲学上の大テーマを、教育学を起点として斜めからとらえ直していくこととなるだろう。そこでは、“現れ”がいまだなく、むしろ“現れ”が現れてくる原初に立ち会うことで、この分離の個体発生における有り様が描かれることになるはずである。

なお、従来のメルロ＝ポンティ研究の文脈から言えば、鏡像段階と模倣というテーマのうちでも、特に前者はラカンの鏡像段階論を早くから取り上げたものとしてよく知られている⁷。しかしながら、鏡像段階と模倣が個別に分析されることはあっても、両者の関係性にまで踏み込んだ研究はこれまでなされてこなかったと言える。対して本研究は、幼児の鏡像経験を模倣の変容の中の大きな転回点として位置づけることを目指していく。それは、身体的な共鳴としての模倣から出発して、幼児の模倣が他者の像を再現することへと向かうプロセスの中に、鏡像を巡る出来事の意味を探るということに他ならない。鏡の経験を通して私たちは自己像と出会うことになるが、それは像があることを前提とした自己像との遭遇であるのではなく、まさしく「像そのものが見えるようになるプロセス」⁸として、存在とその像（あるいは存在と現れ）の領野が開かれる原初的な場面となるだろう。この領野の上でこそ、模倣は私たちが良く知る模倣として、そし

て〈ふり〉は〈ふり〉として、立ち現れてくることが可能になるのである。

この意味で本稿は、縦糸として〈ふり〉と模倣を共通の文脈に位置づけるとともに、横糸として鏡との出会いを巡る出来事についての分析を交差させることで、人間の生のうちに「像」が現れてくるプロセスを描くことを試みるものである。そのために以下ではまず、〈ふり〉と模倣の思想的な背景についての検討を迂回していくこととする。

2. 〈ふり〉と模倣を巡る思想的背景

本質と虚構、ホンネとタテマエ、遂行と演技、正体とふり。そこで問題を生じさせているのは、哲学上おそらくは最も古い時代から問われてきたあの図式、すなわち「存在」と「現れ」の分離の図式である。端緒をソクラテス・プラトンに持つこの図式は、両者の間のズレと一致を巡る問題圏を形成しながら、長らく彼らの意志を守り抜いてきた。ルソーもまたしかりである。

『学問芸術論』においてマナーを徹底的に批判したルソーは、「存在」と「現れ」の分離、ひいてはそこに起因する内面と外面の不一致に恐怖する。彼にあって礼儀作法とは、内面の感情を覆い隠すのみならず歪めてしまいさえする外見でしかない。「外面の態度がつねに心情の反映であり、礼儀が美德であり、われわれの格率が規範としてわれわれに役立つものであり、そして真の哲学が哲学者の名と一致するものであるならば、われわれがともに生きるということとは、なんと快適なことであろうか。しかしながら、それほど多くの資質がかねそなわっていることは、あまりにもまれであり、徳がまたそれほど華麗に現れることもほとんどあり得ない⁹⁾。外見的なマナーと本心とは根本的に乖離してしまっているのである。しかし、こうしたルソーの恐れには前史が存在している。エラスムスである。

シャルチエによれば、「礼儀作法」概念の歴史の上で最初のきっかけを作ったエラスムスの『子どもの礼儀作法について』は、ラテン語で出版されることで、ヨーロッパの知識層全体に統一された行動の規範を提供することになったという¹⁰⁾。しかし、その図式は後のルソーのような懐疑に満ちてはいない。「エラスムス流の礼儀作法規則が普遍的であるというのは、それが倫理的な原則に則っているからにほかならない。各個人において、外見とはそのひととなりの徴となるものであり、行動様式とは精神や魂の特質の確実な指標なのである。良き性質、美德、知性の現れ方はただひとつで、態度のみならず服装にも、ふるまいのみならず言葉遣いにも敏感に反映されるはずだというのである。『子どもの礼儀作法について』のいずれの章も、こうした見えるものと見えないもの、外部と内部、社会的なものとの個人的なものとの等価性に基づいて書かれている」¹¹⁾。このように、外見と実在、「現れ」と「存在」との完全な一致が転倒し、礼儀作法が外見として切り出される中で偽善的な仮面へと変わっていく過程にルソーは生きていたと言えるだろう。

そして、フランス現代思想に至って状況は再び一変する。「存在」と「現れ」はもはや

後者に対する前者の優位性を維持することが出来ないものとして描き出されることになる。ボードリヤールが「シミュラクル」について語る時、オリジナルとコピーの関係性は転倒し、そこには「現れ」だけが戯れ続ける空間が開かれることになるだろう¹²。もはや「存在」には場所が与えられなくなった時代こそが、ポストモダンなのだ。

こうした観点から見ると、模倣と〈ふり〉とが共有している地平とは、まさしくこの「存在」と「現れ」の一致と不一致に関わる問題領域であるように思われる。〈ふり〉が、思惟をもって行為する主体のあり方（存在）とその行為の他者への現れの一致する「遂行」から、存在と現れがズレていく「演技」までのスペクトラムをなすものとして捉えられるのに対して、模倣はそもそも存在と現れが一致しないようなものとして理解されていると言える¹³。模倣する主体は、自らの存在とは一致してはいない他者の現れをその身に引き受けると考えられているからである。

ただし、私たちは〈ふり〉と模倣についての次なる問いに直面することになる。すなわち、〈ふり〉と模倣の両者はともに、現れを自明の前提としているのだろうか？ 像があって、それにあわせて振る舞いを生じさせているのだろうか？ と。この問いに対して、本稿は模倣と鏡像についての分析を通して接近していく。ひとたび模倣の発達というものを視野に入れていくなら、この“現れ”あるいは“像”が自明のものとしてあるということそのものが揺るがされることになるだろう。なぜならそれは当初からあったのではないのだから。

こうした関心のもと、以下ではメルロ＝ポンティがソルボンヌ大学において行った、「幼児の対人関係」と「意識と言語の獲得」と題された2つの講義を検討していくこととする。

3. メルロ＝ポンティの模倣論

3-1. 素朴な模倣観と未分化な生

そもそも、私たちの日常的な感覚から見た模倣という現象は、ある行為を真似するという意識によって生じてくるものとして捉えられている。そして多くの場合、ふりもまた同じ文脈に位置づけられていることだろう。そこでは誰かの仕草を真似たり、ある種の声色を意図的に再現したりすることとして、模倣やふりはイメージされている。このように私たちは往々にして、意識によって統御された行為として模倣やふりを想定しているのである。

しかし、メルロ＝ポンティは特に模倣を取り上げつつ、こうした想定には脈々と受け継がれてきた素朴な思い込みが潜んでいると述べている。それは、自己に閉じ込められた心理作用という古典心理学の残滓である¹⁴。そこでの模倣は以下の経路を辿ることになる。

そもそも私と他者とは切断されているのであり、他者の行為を理解するという際には

「私は自分自身の身体についてもっている内的経験を他人に移し変える」¹⁵ことで他者の身体的現象を解釈することが必要とされる。それゆえ、他者の行為を模倣するという際には、私が他者の身体活動をまず意識的に「解説」したうえで、「他者の視覚像」と「自分自身の内受容的身体像」との対応関係を一点一点組み立て、その後によく自らの筋肉を動かすことで行為を再現するという道を辿らなければならないことになるのである。こうした一連の作業をメルロ＝ポンティは「記号解説」と呼んでいた¹⁶。

そして、このような「模倣」観では説明のつかないものがある。それが子どもの模倣である。例えば誕生後の極めて早い時期から観察される笑顔の模倣などは、他者の笑顔の意識的な解説どころか、他者そのものの存在に関する認識さえも無いままに生じる¹⁷。しかも、自分自身の身体に関する内受容的－体感的感覚に比べて、自分の身体についてあまりに少ない視覚像（たとえばそれは、近づければ見えるようになる手足などに限られている）しか有していない子どもには、自分の身体の視覚像と他者の身体の視覚像をひとつひとつ系統的に対応させるための材料さえない。それでも子どもは微笑みかけてくる他者の笑顔に呼応し、表情を模倣するのである¹⁸。

メルロ＝ポンティはこうした事例を確認しつつ、「心理作用が当人にしか近づき得ないものであって、私の心理作用も私だけが近づくことが出来て、外からは見えないものだとする偏見」¹⁹こそを、まず放棄しなければならないとしている。むしろ幼児における対人関係的な発達、幼児が自己自身と他者との区別を知らない「未分化な生」を生きているというところから見ていかなければならないのである。いみじくも彼は次のように語っている。

したがって、幼児の発達にはほぼ次のような様相を呈することになりましょう。まず、われわれが「前交通」（マクス・シェラー）と呼ぶ第一の段階があるわけですが、そこにあるのは個人と個人との対立ではなく、匿名の集合であり、未分化な集団生活です。次に、こうした最初の共同性を基盤にして、一方では自分自身の身体を客観化し他方では他人を自分とは違うものとして構成するというふうにして、個人個人が分離され、区別される段階が来ます。もっとも、その個人個人の分離や区別は、後でも見ますが、決して完全に達成されることのない過程ではあるのですが²⁰。

メルロ＝ポンティのこの講義から数十年を経た今日では、こうした新生児による表情の模倣は「新生児模倣」として広く認知されるに至っている。メルツォフとムーアが示した最初期の模倣ともいべきこの共鳴的な模倣は、まさしく意識も明確なイメージも無しに生起するような模倣であり、未分化な生を生きる子どもの「表現」なのだと言える²¹。

こうして、原初の子どもの模倣から議論を始めることによって、私たちは自らの「模倣」観のなかに、身体と身体の間表象を介在させる模倣のみが素朴に前提とされてき

たことを突きつけられるに至った。そしてむしろ幼児の模倣は自他が未分化であることを契機とした、彼らの生そのもののあり方によってはじめられるということが明らかになったと言える。ただし、子どもの模倣は私たちのこの素朴な前提とは異なる平面をまだしばらくは推移していくことになる。追ってみよう。

3-2. 結果の模倣

新生児模倣に続くものとしての子どもの模倣には、一つの見逃すことの出来ない特徴がある。それは、子ども（しかも模倣を始めたばかりの子ども）の模倣が、他者を模倣するのではなく、他者の[・]行[・]動[・]の[・]結[・]果[・]を模倣するという点である。こうした模倣についてメルロ＝ポンティは、ギョームを参照しながら次のように語っている。「ギョームによれば、私たちは初め〈他人〉ではなく他人の〈行為〉を模倣するものであって、他人という〈人〉は、その行為の起源が問題になったときに見いだされるに過ぎないそうです。幼児がまず真似るのも、人ではなく動作です」²²。ただし、この動作の模倣ということについては、すぐさまもう一步踏み込んで指摘しなければならない。すなわち、初期の模倣においては、表象を介して他者の動作が再現されるのではなく、他者の動作のその結果が再現されるという点である²³。

この点から、子どもの身振りが模倣の対象である大人の身振りと不完全にしか似ていないということに注目しながらメルロ＝ポンティが語る次の言葉は重要である。「これ（模倣する身振りが対象の動作と近似的でしかないこと）は模倣が「高みに立つもの」だということ、つまり模倣は身振りの[・]全[・]体[・]的[・]結[・]果[・]を[・]目[・]指[・]す[・]の[・]で[・]あ[・]っ[・]て[・]、[・]そ[・]の[・]細[・]部[・]の[・]再[・]現[・]を[・]目[・]指[・]す[・]の[・]で[・]は[・]な[・]い[・]、[・]と[・]い[・]う[・]こ[・]と[・]を[・]意[・]味[・]し[・]て[・]い[・]ま[・]す」²⁴。すなわち、動作の忠実な再現ではなく、動作の結果の模倣をここで彼は初期の模倣として強調しているのである²⁵。しかも興味深いことに、それが、大人にとって模倣に見えるのは、同じ結果を目指す振る舞いが一致しているように見えるからに過ぎない。ゆえに、当然のことながら、時に振る舞いと振る舞いの間にズレが生じることも起こりうる。それは例えば、メルロ＝ポンティがギョームの息子の観察から引用している子どもの模倣によって例証されている²⁶。ギョームによれば、彼の息子は9ヶ月の頃に鉛筆を逆に握ってテーブルを何回かたたいた後に、鉛筆を逆に持ち替えて、削った方を紙に向けたという。この一連の振る舞いのなかで「この子にとって問題なのは父親の身ぶりを再現することではなく、父親と同じ結果（紙に対する鉛筆の位置）を得ること」²⁷なのであるとメルロ＝ポンティが語るとおり、子どもの模倣にあっては、他者の身体の各部位と自己の身体の各部位との直線的な一致が生じるのではなく、モデルと世界との関係に生じた結果を目指して模倣が生起するのである^{28,29}。

実はこのような、他者の行動の結果を再現する模倣は、今日の動物行動学の研究では「エミュレーション学習」という名で呼ばれている。トマセロが霊長類研究において確認

したこの学習は、「外的事象－他者が生み出した環境内での状態変化－に焦点をあてた学習であり、同種の行動や行動ストラテジーに注目したものではない」とされる³⁰。

ところで、模倣と表象との関係については、どのように考えるべきであろうか？ それは、他ならぬ身体によって説明される。メルロ＝ポンティは、他者の行動をモデルとして表象を介しつつ自己の身体との対応関係を組み立て、それによって他者の行動を再現する古典的な模倣観を批判しながら次のように述べる。

人は自分自身の身体を、〈諸感覚のかたまりが運動感覚的イメージ image kinesthésique によって二重化されたもの〉としてではなく、対象へ向かってゆくための組織的な手段 moyen systématique（視線の場合には、対象を検査するための手段）として扱っているのです。模倣は、他者も同じ目標にゆきつくために我々と同じそれらの手段を使うと考える場合にのみ理解されうるものであり、それ以外は説明のしようがありません³¹。

すなわち、私たちは運動をする前にその運動を表象し、それによって筋肉の収縮を考えたりするわけではないのであり、それゆえ他者の行動を模倣するという際にも、知的な作業に基づく運動そのものの表象をまず描き、それを自己の諸感覚に重ね合わせて二重化させることで身体を操作するわけではない³²。むしろある対象（あるいは端的にモノ）に向けて組織立てられた他者の行動を目にすることで、同じ対象に触発された私の身体による行動が模倣として生起するのである。

ここで示されているような、対象（あるいは端的にモノ）と身体との関係については、ソルボンヌ講義に先立つ著『知覚の現象学』において、「自分の身体を動かすとは、その身体を通じて諸物をめざすこと、何の表象もともなわずにその身体の働きかけてくる諸物の促しにたいして、身体をして応答させることである」と述べられていた³³。身体とはこの意味で、「われわれを取り囲む自然的・文化的世界への或る「身構え prise」³⁴として、対象へと向かうための「組織的な手段」として、「現勢的または可能的なある任務に向かってとる姿勢」³⁵としてあると言える。「身体図式」とは、そうした身体が世界と取り結ぶ関係の、ある安定した様式に他ならない。

ところで、この「結果の模倣」が自己と他者との関係に閉じた中で生じるのではなく、それぞれの身体が目指していく対象がそこに介在しているということは重要であるように思われる。メルロ＝ポンティはこの原初の模倣に介在するモノを「他者と私とを媒介する第三項」として位置づけていた³⁶。そしてこのモノの存在によって媒介された模倣を通して、自己と他者とは異なるものを含み込んだ三項関係が成立するのである限り、この「結果の模倣」は、身体共鳴による新生児模倣からの大きな飛躍のうちにあると思われる。それは自己－他者の二項関係さえ存在しない癒合的な状態から、自己と他者とモ

ノの三項関係が生起していく契機だと考えられるからである。最初期の「私の世界」がここに生じはじめていると言えよう。

このように初期の模倣は、対象を共有することによって生じる結果の模倣であったが、この部分的に似通った振る舞いとして生じる模倣を経て、私たちは「人」を対象とした「他者の模倣」へと移行していくことになるのである。

3-3. 他者の模倣

先の「結果の模倣」が人称を強くは問わない模倣であったのに対して、それに続く模倣は、他者の存在が大きな意味を持つことになる。ただし、ここでメルロ＝ポンティが述べている「他者の模倣」もまた、孤立した者たちの戯れなのではなく、他者たちとの癒合的な生を基盤として現れてくるものに他ならない。「模倣は、他人による籠絡であり、自己への他人の侵入であり、それはまた自分がその面前にいる人の身振りや動作、気に入った言葉、行為の仕ぐさなどを、自分に引き受けようとする態度です」³⁷と彼が語るとおり、「他者の模倣」に至ってようやく対象となる他者の人称が問題となると言える。この時期の模倣を通して、対象となる大人は威厳のあるもの、そして万物の尺度へとすこしずつなっていくのであり³⁸、幼児は自らを取り巻く世界をそこから捉えるようになっていく。それはこの後、彼／彼女自身がそれを生きるようになる規範の創設でもある。

しかも、そこで生じる模倣は、他者による籠絡であり侵入であると同時に、他者の身振りを引き受ける態度でもあるような、能動と受動が入り交じった癒合状態にある模倣だと言える。それゆえに、この模倣にあっても振る舞いのイメージが先行してそこに身体各部を合わせていくわけでは決して無く、幼児が大人の行動を模倣するとしても、知覚した大人の行為を自らの身体の運動によって実現するという、知覚と運動性との直接的連帯として実現されるものに他ならない。次のメルロ＝ポンティの言葉はそのことを端的に示している。「模倣とか物まねは、いろいろな動作やいろいろな顔の表情を自分で反復しうることを示すものですが、そうした能力は、私が自分自身の身体に対してもっている支配能力と共に私に与えられています。それは「表現の欲求にかなった体位機能」なのです³⁹。このようにメルロ＝ポンティは、模倣のメカニズムを「知覚と運動性 motricité との根源的対応関係」⁴⁰として図式化していた。もちろん身体を内受容的に感じることの多い乳児の時期にはこうした身体の運動性は非常に脆弱なものだと言えるが、さまざまな感覚領域が開かれるにしたがって、それらは徐々に「組織化された全体」として機能し始めていくのである。このように「他者の模倣」は、特定の他者の振る舞いを知覚した幼児の身体が、そこでの表現の欲求に巻き込まれ、その身体によって応答していくということとして生じるものだと言える。この意味でこそ、メルロ＝ポンティが模倣を「〈私の身体〉と〈他人の身体〉と〈他人そのもの〉とを結合するただ一つの系の

あらわれ」⁴¹として述べていたことが理解可能になるのである。

ただし、ここで生じていた他者の模倣は、特定の他者の全体を捉えて模倣していくものに他ならない。その意味では、ある他者の一部の振る舞い、そしてその細部を模倣していくような模倣は、依然としてこの地平には登ってきていないのである。

3-4. 部分的模倣

他者のある振る舞いを部分的に切り出してひとつのイメージとして捉え、それを自らの身体で意図的に再現するという模倣は、先行する模倣から一定の期間を経て現れるとされる。こうした模倣をメルロ＝ポンティは、結果の模倣や他者の模倣と区別して「部分的模倣」⁴²と呼んでいる。そして何より、メルロ＝ポンティが「この種の（意図的な）模倣は対象そのものを問題にするのではなく、対象のシーニュ *signe* すなわちその表現を問題にする」⁴³と述べるように、この部分的模倣に至ってようやく、私たちが通常理解している意味での、表象を介した他者の振る舞いの模倣が現れてくるのである。

では、ここで示されているような、模倣の対象となるシーニュや記号、あるいは端的に像はどのように現れてくるのであろうか？

その機制を指し示して、メルロ＝ポンティは端的に次のように語っている。「私は初め〈他人の顔の表情〉の中で〈私の志向〉を生きたり、また逆に〈私自身の行為〉の中で〈他人の意志〉を行きていたにもかかわらず、しだいに私の身体を認識し、また私の身体と他人の身体とを根本的に区別するゆえんのものもを認識するようになります。幼児の経験が進歩するにつれて、幼児は、自分の身体がなんといっても自分の中に閉じこもっているものだということに気づくようになり、そして特に、主として鏡の助けを借りて獲得する〈自分自身の身体の視覚像〉から、ひとは互いに孤立し合っているものだということをおぼようようになります」⁴⁴。

この言葉が示すところを最大限に受け取るとするならば、それはそれまで癒合的な生を生きることによって自己と他者の関係性さえも持ち得なかった子どもが、鏡に出会い、いつしか私の身体と他者の身体を切り分ける経験をするようになる場面とも言える。それはまた、まさしく他者の振る舞いが像として現れてくることによって可能となる「部分的模倣」を可能にするメカニズムに他ならない。それゆえ、他者の模倣から部分的模倣への移行のなかで生起する「像」と「鏡」を巡る経験の持つ意味こそが問われなければならない。そしてそれは、存在と現れの世界が立ち現れる原初的な出来事でもあるはずである。

4. 鏡像段階—可視的な世界への参入—

鏡の経験、この日常的で取るに足らない経験も、自己に関わる問題圏のなかでは、非常に大きな意味を帯びてくる。「〈自己の身体の意識〉の発達に関する最も重大な出来事は、特に鏡の使用によって、〈自己の身体〉というものの表象あるいは視覚像を獲得する

ということです」⁴⁵と繰り返し述べられているとおり、ここには現れの端緒、しかも私の現れに関わる機制が織り込まれている。ワロンによって報告され、後にラカンも『エクリ』の中で注目したこの鏡像段階について、彼ら二人とメルロ＝ポンティとの距離を測りつつ確認していくこととする。

そもそも、この鏡像段階は、鏡を前にした幼児がそこに映った像を自分の像として認知するに至る過程を指している。生後3ヶ月以前には見られることのない鏡に対する明確な行動が、4、5ヶ月頃には鏡を見つめるという反応として生起しはじめるとされるが、この時点では依然としてその鏡に映っているものを像として認識してはおらず、例えば、鏡に映った父親が幼児に話しかけると、彼は驚いて父親の方に振り返るという。つまり、ここでは鏡に映った父親を「単なる像」として見極めるのではなく、それをある種の実在に対するものであるような鏡像への関わりが見られる。それは、「像と実在との関係」⁴⁶そのものがいまだ存在していない段階と言え、鏡の中の像を「準-実在 *quasi-réalité*」として捉えているとされる。

こうした状況は動物において確認されているものと同様である。ケーラーによるチンパンジーの観察がまさにそれを伝えている⁴⁷。ケーラーによると、そのチンパンジーは鏡の前に置かれると、その鏡の後ろに手をまわして探索をおこなったという。チンパンジーにとって鏡像は平面上に映し出されたものなのではなく、まさしくそこに奥行きをもって存在しているかのような実在性を持つものとして認識されていると言える。と同時に、そこには若干の違和感もあるのだろう。彼は実在の厚みを確かめるために、鏡の後ろへと手を伸ばしたのである。それゆえに、チンパンジーは〈像そのもの〉の意識が生まれる瀬戸際にいるというのがメルロ＝ポンティの見立てである⁴⁸。

では、人間の幼児の鏡像経験はどのように推移していくのか？メルロ＝ポンティはワロンとともに、次のように述べている。「幼児は最初、自己の身体の鏡像の場合には、他人の身体の鏡像の場合にもまして、それを本当の身体の一つの分身 *une sorte de double du vrai corps* と見ていた、と考えなければならない」⁴⁹。すなわち、先に見た父親の鏡像に対するのと同様、自己の鏡像に出逢う際にも、幼児はそこに存在している自己（像）をある種の実在（準-実在）と受け止めるということである。ここで「分身」と呼ばれているのは、内受容的な身体を通して「ここ」にいる私とは異なる実在として、遍在している〈もう一人の私〉を指している。

ただし、重要なのは〈もう一人の私〉の存在様態そのものであるだろう。メルロ＝ポンティが「鏡像において大事なものは、幼児にはそれがあると言われ、またその触覚的身体とは違ったところに位置すると言われる〈第二の身体〉ではなく、むしろ身体の一つの距離をもった同一性、つまり遍在性 *ubiquité* なのです。なぜなら、身体は鏡の中にあるながら、同時に私がそれを触覚的に感じているこの場所にもあるものだからです」⁵⁰と語るとおり、幼児の未分化な生は他者たちと同様に、鏡のうちに遍在する私へも癒合し、

〈外から見える私の身体（＝分身）と〈私の内受容的身体〉と〈他人〉との一つの系〉を確立させているのである。

そしてそれゆえに、鏡像には、おとなの空間性とは全く異なった空間性、すなわち〈像に粘着した空間〉があるとされるが、この空間性こそが鏡像段階を経て再配分されるとワロンは考えていた。ワロンはこの空間性の再配分、すなわち鏡の中の準実在が有していた奥行きを平面の写像へと圧着し、「固有の空間性を持たない見かけ（現れ・像）に還元する」この作業を、知性が行うとしている⁵¹。すなわち、ワロンによれば「最初私は鏡の中に私自身の分身を見るのだが、次に、自分の経験を知的に自覚することによって、この像から実在性を除き去り、そしてさらにこの像を、鏡とは別に内受容性の方から与えられているこの身体の単なる象徴・反射・表現などとして扱うようになるのだ」⁵²。

ただし、こうした像への還元を知性が遂行すると考えたワロンに対してメルロ＝ポンティは、それが知性による認識の進歩だとするなら、ひとたびその現象が理解されれば、もはや像は像でしか無くなるはずであるが、それにも関わらず、鏡を前にした私たちは依然として「像のうちに映されている人物の現前」を感じてしまうということが起こりうるとしている⁵³。それは準－実在性の残滓とでも呼べるようなものであり、写真や肖像に対する私たちの態度のうちに典型的に現れるような現象だと言えよう。私たちはそれらの像を踏むことも破くことも容易ではないのである。

それゆえメルロ＝ポンティはラカンとともに、還元の操作を知性に委ねるのではなく、他者という項を組み込んだ、一つの「出来事」として捉えようとしていく。彼は鏡像の現象を「他人との共存に関する総合」として位置づけつつ、次のように語っている⁵⁴。

幼児にあっては、鏡像の了解とは、鏡の中に見えている姿をおのれの姿と認めるところにあります。幼児の世界に鏡像が入りこんで来るまでは、身体は幼児にとって、強烈に感じられはしても混沌とした現実なのです。自分の姿を鏡の中に認めるということは、幼児にとっては、自己自身の視像がありうることを学ぶことです。そのときまで、かれは自分を一度も見たことがなかったのであり、そうでないとしても、せいぜい身体の目に見える部分を眺めるという形でいわば自分を盗み見たことがある程度です。ところが鏡の像を通して、彼は自分自身の観客たりうようになります。幼児は、鏡像の習得によって、自分が自己自身にも他人にも見えるものだということに気づきます。内受容的自我から可視的自我への移行、つまり内受容的自我からラカン氏のいわゆる「鏡の中の私」への移行は、パーソナリティの或る形態・或る状態から別な形態に移ることなのです⁵⁵。

このように、鏡像の経験とは何よりも、部分的で断片的なものに過ぎなかった自己の身体の視像が、一つの全体的なゲシュタルトとして立ち現れる瞬間であり、それがまさ

しく他者たちによって先取られていたことを告げる出来事なのである。

ただし、廣瀬浩司が「ラカンが想像的なものにおける「像」の理念化をひそかに前提としているのに対して、メルロ＝ポンティは感覚的なものただなかにおいて内在的な距離が生まれ、存在と現れが分離し、像が像として生成していく過程そのものを問おうとしている」⁵⁶と指摘している通り、メルロ＝ポンティが分身や準－実在からはじめながら鏡像の経験を語り、そこに「〈感覚的なものの再帰性〉」⁵⁷を記述したことの意味を私たちもまた重視すべきであるだろう⁵⁸。ラカンが『エクリ』の中で鏡像段階を語る際に示した「主体がある像を引き受ける」という図式が、鏡に映るものを「像」としてすでに捉えた上で生じる同一化と根源的な自己疎外との機制であったのに対して⁵⁹、『眼と精神』と講義「幼児の対人関係」のメルロ＝ポンティは像を像として引き受けるということの手前に踏み留まろうとしている。夢の中や病的な状態において、自分を外から眺めるかのような〈自己視 autoscopie〉があること、そしてそれが幼児が鏡の中に見ている自分自身の身体について持つ最初の関係性と類似していることを指摘しつつ彼が強調するのは、鏡の中に分身を見ていた幼児がその偏在性を通して鏡の中の自己の分身へと移りゆき、そこからこちらにいる自己を折り返し見るという、〈感覚的なものの再帰性〉だった。そして、「自己自身に関する視覚的経験とともに、新しい様式の自己に対する関係が出現することになります。視覚的経験によって、直接的な自己と、鏡の中に見える自己との間の一種の分裂が可能になるのです」⁶⁰とメルロ＝ポンティが語るとおり、分身が私を見ているということ（すなわち〈自己視〉）だけでなく、その分身はまさしく私が距離を持った同一性によって生きているものであるというこの感覚的なものの再帰性による視覚的経験のうちで、それまで分身としてあったものがいつしか像へと生成してくるのである。この意味で、そこにおいてはじめて鏡は鏡として存在することになる。一見謎めいた「私が〈見つ－見られるもの voyant-visible〉であるがゆえに、つまり、そこには〈感覚的なものの再帰性〉があるが故に、鏡が現れるのであり、鏡はその再帰性を翻訳し、それを折り返すのだ redoubler」⁶¹というメルロ＝ポンティの言葉の内には、こうした意味が込められていたと言える。

このように彼がゆっくりとした足取りで追い求めていたのは、「見るもの」と「見えるもの」との織りなす可視的な世界が創設されるまさにその場を鏡の経験として語り出すということに他ならない。ここにおいて像は像として生成し、これ以降、模倣とふりは私たちが素朴に理解している形式に、しかし現実には特殊でどこもない形式に至る条件を得たと言えよう⁶²。それはまた、存在と現れの二項対立図式がそこから生成してくるような端緒の出来事だったのである。

5. 終わりに

私たちが〈ふり〉や模倣について考えるとき、そこではある臆気なイメージが想定さ

れ、それに合わせて身体各部を呼応させるかの如く現れてくる振る舞いが問題となっている。しかし、ここで素朴に前提とされているような、あるイメージがイメージとして、あるいは一つの像が像として捉えられるということは、発達上は決して自明のことではなかったはずである。そうした極めて素朴な地点を確認するために、本稿はメルロ＝ポンティの模倣論と鏡像段階論を確認してきた⁶³。そして私たちが確認してきたように、鏡像段階を経て像が像として現れる可視性の世界に生きることが、表象を対象とする部分的模倣の、そして「ふりをすること」の絶対的な条件だったといえるだろう。

しかしながら、他者の模倣だけでなく部分的模倣もまた、刹那的に消えていくような儚いものではないように思われる。なぜなら、私たちは幼児期を過ぎてなお、遂行として模倣を生きることがあると考えられるからである。〈ふり〉という概念においてはそれ自体に矛盾を内包しているこの表現はしかし、メルロ＝ポンティが同じくソルボンヌ講義において語っていたこととも呼応している。

他人の行為のある局面を採り入れると、意識の全体が模倣している相手の「スタイル style」をとってしまうのです。言いかえれば、真の模倣は、意識されている限界を超えて拡散し全体的になる、ということです。一度調節される *accommodée* と、模倣はおのれ自身を超え出て行きます⁶⁴。

ここで示されているように、「超出 *dépassement* こそが、新たな構造の我有化 *appropriation* を可能にする」という図式は、模倣が刹那で終わることなく、私たちの生そのものの構造に新たな構造化を促す契機となりうることを示している。そして何より、〈ふり〉もまたこうした側面を有していることだろう。おのれの外延をズラしたり上げたりしつつ、新たな生の構造を再構造化していくことを、私たちは今後〈ふり〉の地平で捉えていくことになるはずである。

参考文献

- Al-Saji, A. 2005, "La vision dans le miroir - L'intercorporéité comme commencement d'une éthique dans *L'œil et l'esprit*", Chiasmi International, série 6, VRIN, pp. 253-271.
- ボードリヤール 1984, 『シミュラクルとシミュレーション』、竹原あき子訳、法政大学出版局、p8.
- シャルチエ 1994, 「差異の創出と文化モデルの普及」、『読書と読者』、長谷川輝夫・宮下志朗訳、みすず書房、pp. 41-92.
- ギブソン 1985, 『生態学的視覚論』、古崎敬・古崎愛子他訳、サイエンス社。
- Gordon G. Gallup Jr. 1970, 'Chimpanzees: Self-Recognition', *Science*, New Series, vol. 167, No. 3914, p86-7.
- 廣瀬浩司 2007, 「鏡像のメタモルフォーズと纏う身体の行為論 — メルロ＝ポンティ、ラカン、ドゥルーズの絵画論の射程 —」、大宮勘一郎・神尾達之他『纏う』、水声社、pp. 51-91.
- 河本英夫 2006, 『システム現象学』、新曜社。
- ラカン 1972, 「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階」、『エクリ』、宮本・竹内他訳、弘文

- 堂、p123-133。
- Meltzoff & Moore 1997, “Explaining Facial Imitation: A theoretical Model”, *Early Development and Parenting*, vol. 6, pp. 179-192.
- Merleau-Ponty, M., *Phénoménologie de la perception*. : Gallimard, 1945 = メルロ = ポンティ 1967、『知覚の現象学 1』、竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房 & 1974、『知覚の現象学 2』、竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房。
- Merleau-Ponty 1975, *Les relations avec autrui chez l'enfant*, CDU, 1975 = メルロ = ポンティ 1966、「幼児の対人関係」、『眼と精神』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1966年に所収。
- Merleau-Ponty 1989, *Merleau-Ponty à la Sorbonne : Résumé de cours 1949-1952*. : Cynara = メルロ = ポンティ 1993、『意識と言語の獲得』、木田元・鯨岡峻訳、みすず書房。
- Merleau-Ponty 1964, *L'Œil et l'Esprit*, Gallimard. = メルロ = ポンティ 1966、「眼と精神」、『眼と精神』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1966。
- Merleau-Ponty 1969, *La prose du monde*, Gallimard. = メルロ = ポンティ 1979、『世界の散文』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房。
- 宮川幸奈・土戸敏彦・山岸賢一郎・岡野亜希子・京極重智・藤田雄飛 2013、「〈ふり〉の教育哲学1.5」、『教育基礎学研究』、第11号、pp. 61-75。
- ルソー 1978、「学問芸術論」、山路昭訳、『ルソー全集』、第4巻、p17。
- トマセロ、『心とことばの起源を探る』、大堀壽夫・中澤恒子他訳、勁草書房 p36。
- 土戸敏彦 2008、「「ふりをする」ことの伝授としての教育」、『九州大学大学院教育学研究紀要』、第11号、pp. 99-109。
- 土戸敏彦 2010、「行為の両義性としてのパフォーマンス」、『九州大学大学院教育学研究紀要』、第13号、p77-93。

〔注〕

1. 土戸敏彦 2010、「行為の両義性としてのパフォーマンス」、『九州大学大学院教育学研究紀要』、第13号、p77-93。
2. 土戸敏彦、「「ふりをする」ことの伝授としての教育」、『九州大学大学院教育学研究紀要』、第11号、2008、pp. 99-109。
3. 土戸敏彦 2010、p79。
4. 宮川・土戸他 2014、「〈ふり〉の教育哲学1.5」、『九州大学教育基礎学研究』、第11号、p62。
5. メルロ = ポンティからの引用に際しては以下の通り。
 PP : Merleau-Ponty, M., *Phénoménologie de la perception*. :Gallimard, 1945 = 『知覚の現象学 1』、竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、1967 & 『知覚の現象学 2』、竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房、1974。
 RA : *Les relations avec autrui chez l'enfant*, CDU, 1975 = 『眼と精神』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1966年に所収。
 MS : *Merleau-Ponty à la Sorbonne : Résumé de cours 1949-1952*. : Cynara, 1989。
 OE : *L'Œil et l'Esprit*, Gallimard, 1964. = 『眼と精神』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1966年に所収。
6. この意味で〈ふり〉は明確に文化的な形式をもつと言える。土戸敏彦の〈ふり〉に関するテーゼを参照。宮川幸奈・土戸敏彦・山岸賢一郎・岡野亜希子・京極重智・藤田雄飛、「〈ふり〉の教育哲学1.5」、『教育基礎学研究』、第11号、2013、pp. 61-75。

7. 先行研究としては以下がある。

- 廣瀬浩司、「鏡像のメタモルフォーズと纏う身体の行為論 — メルロ＝ポンティ、ラカン、ドゥルーズの絵画論の射程 —」、大宮勘一郎・神尾達之他『纏う』、水声社、2007、pp. 51-91.
8. Al-Saji, A. 2005, "La vision dans le miroir - L'intercorporéité comme commencement d'une éthique dans *L'oeil et l'esprit*," *Chiasmi International*, série 6, VRIN, pp. 253-271. 廣瀬、前掲書、p57.
9. ルソー、「学問芸術論」、山路昭訳、『ルソー全集』、第4巻、p17.
10. シャルチエ「差異の創出と文化モデルの普及」『読書と読者』、長谷川輝夫・宮下志朗訳、みすず書房、1994、pp. 41-92.
11. シャルチエ、前掲書、p52.
12. ボードリヤールは次のように述べている。「イメージは次のような段階を経てきたようだ。イメージはひとつの奥深い現実の反映だ。・イメージは奥深い現実を隠し変質させる。・イメージは奥深い現実の不在を隠す。・イメージは断じて、いかなる現実とも無関係。つまりイメージはそれ自身純粋なシミュラクルだ」。ボードリヤール『シミュラクルとシミュレーション』、竹原あき子訳、法政大学出版社、1984、p8.
13. 他者の現れを私もまた現れとして再現するのだとすれば、そこでは他者の存在のうちなる内面も私の内面も問題とはならず、むしろ、他者の現れ（すなわち像）と私の現れとの“戯れ”そのものが生起しているとさえ言えるかもしれない。
14. なお、この「幼児の対人関係」においてメルロ＝ポンティは、古典心理学者の具体名を挙げてはいない。
15. RA, p27 (p130).
16. RA, p27 (p130).
17. 「幼児も、他人の笑顔と呼ばれる視覚的表現を再生するように、自分の筋肉を動かさなければなりません。だが、どんなふうにして幼児がそれをするのでしょうか。他人が自分の顔についてもつ内的運動感 *sentiment moteur interne* を、幼児がもっていることはもちろんないでしょうし、また自分自身の場合にしたところで、幼児は笑っているおのれの視覚像 *image visuelle* をもっているわけではありません」。RA, p29, (p133).
18. それはもちろん、成人においても同様である。たとえば私たちは、後頭部については直接的に見ることが出来ないにもかかわらず、体感としては仰向けに寝ている際になどにその部位を感じる事が出来る。
19. RA. p30 (p. 133).
20. RA. (p137).
21. Meltzoff & Moore 1997, "Explaining Facial Imitation: A theoretical Model", *Early Development and Parenting*, vol. 6, pp. 179-192.
22. RA., p30 (pp. 134-5).
23. 「模倣は同じ一つの対象をめぐる他者の活動と私の活動の出会いとしてしか理解されません。模倣するということは、他者と同じように振る舞うということではなく、同じ結果に到達するということなのです」MS, p32 (p41).
24. MS, p42 (p33).
25. MS, pp. 33-4 (pp42-3).
26. 他にも、ある子どもは、両目を左右に動かす運動を模倣しようとして、頭をぐるっとまわしたという。なお、ギョームが伝えるこの子どもは生後32ヶ月の時にこうした振る舞いをしている。本稿で確認する鏡像段階が生後6ヶ月から18ヶ月くらいであることを勘案すれば、ここで確認された結果の模倣は鏡像段階後にも残存したということになる。このことから言えるのは、像をめぐる発達は一挙に、そして一律に移行が生じる類のものではないということであろう。

27. MS, p32 (p41).
28. 「この事実は、幼児が結果を模倣するものであって、モデルがその結果を得るのに使う手段（すなわち身体そのもの）を模倣するわけではないということをよく示しています」。MS, 34 (p43)。括弧内：藤田
29. 他者と世界との関係を再現することとして模倣を捉えるとき、私たちはそこに子どものデッサンが目指したものと対の関係性を見出すことが可能である。子どもは世界との関係性を、彼らと対象や光景との接触の痕跡をキャンバス上に描くのである。cf. メルロ＝ポンティ、「表現と幼児のデッサン」、『世界の散文』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1979。
30. トマセロ、『心とことばの起源を探る』、大堀壽夫・中澤恒子他訳、勁草書房 p36.
31. MS, p33 (p42).
32. MS, p31 (p40).
33. PP, p161 (p233).
ここに、ギブソンの使う「アフォーダンス」あるいは「環境がアフォードする」ということとの近縁性を見ることは容易だと思われる。詳細な検討については今後に廻したい。ギブソン、『生態学的視覚論』、古崎敬・古崎愛子他訳、サイエンス社、1985。
34. RA, p30 (p134).
35. PP, p116 (I, p174).
36. 「他者と私とを媒介する第三項は、他者の活動と私の活動とがともに差し向けられている外界であり対象だということになりましょう」。MS, (p41).
37. RA. p68 (p. 176). また、次のようにも述べている。「幼児にとって自分の身体は、「体位の受胎」をとおして他人の身体を捉えるための手段となるものです」。RA. p74 (p. 183).
38. MS, p39 (p43).
39. RA, p68 (p176).
40. RA. p69 (p. 177).
41. RA. p68 (p. 176).
42. MS, p33 (p43).
43. MS, p34 (p43).
44. RA, p33 (p. 137).
45. RA, p42 (p148).
46. RA, p45 (p150).
47. RA, p42-4 (p148-9).
48. ただし、チンパンジーの鏡像経験については、ギャラップによるマーク・テストによって、自己認知に至る個体が後に報告されている。この意味では、自己像をめぐって引かれた人間と動物の境界線は、動物の側へと越境していったと言える。ここにはアガンベンの述べる古代の人間学機械の作動が伺える。Gordon G. Gallup Jr. 1970, 'Chimpanzees: Self-Recognition', *Science*, New Series, vol.167, No.3914, p86-7.
49. RA, p46-7 (p152).
50. RA, P61 (p168).
51. 「鏡像には、成人の空間とは全く異なった空間性があるわけです。ワロンも、そこには〈像に粘着した空間〉とも言うべきものがあると言っております。(…) この（鏡の中の）内属的空間は、知能の発達とともに減少していきます。われわれはしだいに鏡像を内受容的身体に引き戻し、またその反対に、像の準局所性、前空間性を、本当の物が存在しているただ一つの空間とはとても比べものにならない一種の見かけとして扱うことを覚えるようになります」。RA, P47 (p153).
52. RA, p60 (p167).

53. RA, p59 (p166).
54. RA, p61 (p168).
55. RA, p55-6 (p162-3).
56. 廣瀬浩司2007、「鏡像のメタモルフォーズと纏う身体の行為論」、『纏う』、大宮勘一郎他著、水声社、p61.
57. OE, p33 (p267).
 また、下記も参照。「鏡のなかの幻影は私の肉体を私の外へ引き出すのだが、それと同時に、私の身体というまったく〈見えないもの〉が、私の見ているもうひとつの身体を身にまとうのだ。以後私の身体は、私の実体がそこに移りでもしたかのように、他人の身体から出てくる線をさえ身につけようようになる。人間は人間にとっての鏡なのである」。
58. メルロ＝ポンティは次のようにも述べている。「鏡像とは自分は単に内的経験によってそうであると信じていたとおりのもではなく、自分はまた鏡の中に見えるこの像でもあるのだということを、幼児に教えるものです。他人の眼なごしも、鏡像と同様、私が空間の一点に局限されたこの存在でもあるということ、つまり〈生きられている私〉とは似ても似つかないこの〈目に見える代役〉で〈も〉あるということ、私に教えてください」RA, p78 (p.188).
59. ラカン「〈わたし〉の機能を形成するものとしての鏡像段階」、『エクリ』、宮本・竹内他訳、弘文堂、1972、p123-133.
60. OE, p58 (p165).
61. OE. p33 (p267).
62. ただし、ここでは素朴な形式を否定するつもりは全くない。むしろ、このごこちない形式こそが、ポジティブに機能する局面が十分想定されるからである。今回は検討するまでに至らなかったが、表象を介在させる模倣は、リハビリなどの文脈へ延長していくことができる理論的可能性を持つと思われる。メルロ＝ポンティは「運動をはじめやすくするためにあらかじめその運動を表象してみたりするのは、たとえば不全麻痺のある種の症例などに見られる病的徴候にほかなりません」(MS, (p40))と述べているが、このことは同時に、表象あるいはイメージを介して今ある身体図式を組み替えることとして想定することが可能であるということを示している。cf. 河本英夫、『システム現象学』、新曜社、2006.
63. ここでは議論を拡散させないために、「鏡像段階」に絞って検討を試みた。しかし、自己像を可能にするものは鏡像に限られるものではないだろう。「身体イメージの獲得には、自分自身を外に見るという事態がともなっている。これは反省によって自分を対象化して捉えることではない。鏡に映してみなくても、身体の全身像をどこかで手にすることができる。これによって身体の何に向かって反省するのかはじめて確保する以上、こうしたイメージの獲得は、反省の前提でもある」と述べながら河本が指摘するとおり、例えば影は身体の全身像を我々に与えてくれるし、「ギリシャで身体像の中心的イメージとなるのは、静かな水に映る自分自身である」と言えるからである。この意味では、細部まで知覚可能な鮮明な自己像を有していることの近代性を指摘することが出来るかもしれない。
 なお、河本はラカンの鏡像段階の位置づけを退けつつ、以下のように語っている。「〔鏡像段階〕には、身体は本来断片でありながら、人為的な手段で全体像を獲得してきたはずだという了解がある。だが、視覚像から身体の全身イメージを確保するという想定には相当無理がある。自分の影の動きを通じて全身のイメージを獲得する際には、視覚的な影の輪郭と、移動する運動感とがともに関与している。おそらく身体イメージには、複数の感覚質の関与がある。そこにまとまりが出現するのは、視覚的な全体像だからではなく、異なる感覚質を共通のイメージへとまとめるためのカップリングが働いていることによるのだろう」。河本英夫、『システム現象学』、p178-180.
64. MS., p. 37 (p.48).

藤 田 雄 飛

なお、本稿は、平成27年度科学研究費・挑戦的萌芽研究「〈ふり〉の教育哲学 — 教育的パフォーマンス論の深化と構築に向けた基礎的研究」(研究課題番号15K13184：研究代表者・山岸賢一郎)による成果の一部である。